

唐芋の主産地から

フェスティバル 代表 郷原 茂樹

何故、『唐芋』と呼ぶのか

『唐芋』という言葉、私たちがあえて使うのは、その歴史的背景と主産地としての意識によるものといえるだろう。

唐芋のわが国への伝来ルートには諸説がある。その一つとして、概ね400年前に唐芋が東南アジアから薩摩の坊津半島に渡来したといわれている。坊津半島はいにしえに中国の鑑真和尚が日本に仏教を伝えるために初上陸した地であり、黒潮のなかに船の道があったのであろう。その後も長く交易の基地であった史実が残っている。

東南アジアはその当時、『唐の国』と呼ばれており、そこから運ばれてきた芋は、唐芋と呼ばれていた。

このような歴史ゆえに、鹿児島ではその当時から、いわゆるサツマイモを唐芋と呼んできたし、今もなお唐芋と呼んでいる。

鹿児島でも唐芋をサツマイモと呼ぶ傾向が出てきたのは、この数十年のことで、焼酎などの商品を全国に売り出す中で、東京中心のサツマイモという呼び方を採用してきた観がある。

しかし私たちは鹿児島の特産品として、やはり唐芋という独自の世界を喪失させてはもったいないと思い、これを使っている。

唐芋ケーキの誕生した背景

私が大隅半島にUターンした時、日本はガット・ウルグアイラウンドの貿易自由化協定をめぐり、大きく揺れ動いていた。外国から安価で輸入される農作物や加工品などに対抗して、農村とその地方を守るにはどうすべきか、日本各地で地域興^{ほうはい}こしや村づくりなどの運動が澎湃と巻き起こっていた。

大隅半島は全国屈指の唐芋の主産地であり、外国から安価なでん粉が輸入されると、唐芋でん粉が大打撃を受けて、農家もでん粉工場も、その地域も衰退するということとさまざまな対抗運動が起きた。

私は唐芋とほとんど関係のない暮らしをしていたが、いつの間にかその運動に引きずり込まれ、唐芋の新しい用途開発を試みるようになった。いろいろ試みた中で、唐芋のケーキ作りに可能性を見出した。

とりわけ、唐芋レアケーキ『ラブリー』は羽田空港でスチュワーデスが並んで買い求め出したことから、大ブームとなり、今日までそれは続いている。デビュー25周年目の昨年、計算してみたら、3億5千万個を販売しており、それは富士山の高さの2千倍以上になることが分かり、自分でも驚いてしまった。

唐芋のもつ可能性は、とても素晴らしい

と、あらためて信ぜずにはおれない。

唐芋は世界をつなぐ

私たちの会社には10年近く前から、海外から次々と視察グループが訪れるようになった。それは主に唐芋の農家をはじめとする加工業者や研究者などで、目的はこういうことだという。

◇唐芋は食材としてマイナーなイメージが付きまとっているが、それを現代的にトレンドィーなものにつくりかえてしまった。その背景を知りたい。

◇唐芋を生かした栽培、加工、販売の6

次産業のノウハウを学びたい。

◇将来の食糧危機を見据え、唐芋を生かすための連携、協力態勢を構築したい。

このような流れを受けて、私たちは日本と中国、韓国の唐芋関係者と『東アジア唐芋友好協会』をつくった。一昨年は鹿児島で第5回のワークショップと世界唐芋交流フェスタを開いた。今年7月は、韓国でワークショップを開くことにしている。

そしてこの国際運動のセンターを、大隅半島に建設したいというのが、私たちのこれからの希望である。